

研究活動4. 情報活用パッケージ分冊（案）の試作

ここでは、研究活動3において提案した情報活用パッケージの項目案の中から、2つの項目について分冊（案）を試作した。試作したのは以下の項目である。

- (1) 生活場面におけるコミュニケーション活用のアセスメント
- (2) 感覚障害（聴覚障害）がある場合の行動観察の視点

いずれも、過去に研究代表者らが携わった研究等において、すでに情報が整理されているものである。研究チームにおける協議の上、分冊の構成については以下のとおりである。

- ① 情報パッケージ全体において、3名のタイプの違う重複障害のある子どもたちを仮に設定しておく。分冊の初めに、その中の1名～数名について教員が対応に困っている状況を事例として提示する。
- ② 解決のための基本的な考え方や基本的な情報を示す。
- ③ 具体的に実践に活用できるツールやポイントを示す。
- ④ ①で提示した事例について、ツールやポイントを使って課題解決した状況を示す。
- ⑤ もっと情報が欲しい人のために情報ソース（文献、ウェブサイト等）を載せる。

生活場面における
コミュニケーション活用の状況の
アセスメント



生活場面における コミュニケーション活用の状況のアセスメント

こんなことはありませんか？

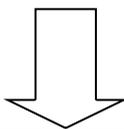
エミリさんは今、小学2年生です。学校ではシーツブランコやトランポリンなどの揺れ遊びが好きで、笑顔になります。感触遊びなどは少し苦手で、粘土に触れると最初は手を引こうとする様子が見られます。

新学期の保護者との面接では、「家族と一緒に使えるコミュニケーションの方法があるといいのですが、どうしたらいいのでしょうか？」という話題がでました。

学校でも朝の会で写真を使って説明していますが、活動やお友達について理解している様子は見られません。また、その活動がやりたいかどうかについて「はい」「いいえ」の意思は、まだはっきりわかりません。



ここがポイント



子どもの生活・学習している場面の行動観察から、コミュニケーション方法の手がかりを探りましょう！



このように考えてみましょう

障害の重い子どもが力を上手に発揮できるのは「知らない場所で、知らないおとなと、初めての活動をする」時よりも「よく知っている場所で、普段から関わっているおとなと、よく知っている活動をする」時である、と感じませんか？周囲の状況を把握することが難しい子どもの立場に立って考えると、日常生活のルーティーンやなじみの活動には、子どもが予測できる手がかりとなる情報（「いつのも歌が聞こえたから、楽しい朝の会が始まるぞ」「〇〇先生がコップを並べているから、これからお茶の時間だ」など）がたくさんあることに気づきます。この、子どもにとって意味のある自然な環境の文脈が、子どもが周囲の状況をわかり（受信）、意思を表しながら主体的に参加する（発信）ことを支えています。

子どもの生活・学習している場面の行動観察では、子どもが、自分のかかわる活動や状況をどのような手がかりで理解しているのかを探ってみましょう。

例えば、赤いキルティング布で作られたシーツブランコの活動について、教室の子どもたちはそれぞれ、様々な情報を手がかりにして予測をしていることが観察されます。

<シーツブランコの活動に関する手がかりの例>

- ①シーツブランコにのせられると揺れを期待するように体を動かす
- ②赤いものを持った人が来るとシーツブランコとわかり笑う
- ③キルティングの布の手触りでシーツブランコとわがりのりこもうとする
- ④シーツブランコの入った箱を教員が準備するのを見て近づく
- ⑤朝の会の時に今日の活動の紹介でシーツブランコの歌を聴いて喜ぶ
- ⑥朝の会の時に今日の活動の紹介でシーツブランコの絵カードを見て喜ぶ
- ⑦朝の会で時に今日の活動の紹介で「シーツブランコ」の手話で喜ぶ
- ⑧「明日はシーツブランコしようね」という教員の話聞いて喜ぶ

これらの例のように、子どもは発達段階に応じて、また活用できる感覚で、様々な周囲の手がかりで「シーツブランコ」という活動をとらえています。実際の活動の場にある手がかり（体を包む布の感触、布の色や手触りなど）から、場所や時間を離れて使われる手がかり（絵カード、音声言語など）まで、様々な段階のものがあります。また、視覚、触覚、聴覚など、様々な感覚をつかった手がかりがあることがわかるでしょう。

① まず、子どもが生活・学習している場面を観察し、子どもがその活動や状況を予測する手がかりとしてどのようなものがあるかを、リストアップしてみましょう。

「帽子をかぶると『散歩の時間だ』ということがわかり喜ぶ」「おとなが子どもの首の後ろに手を入れると抱っこされることがわかって嬉しそうにする」など、日常の自然な状況の中で子どもが次の活動を予測している状況を見つけましょう。それは子どもが、周囲にある自然な手がかりを「受信」して次の活動を予測し、気持ちの準備をしたり自分の行動を起こしたりするきっかけとしていることになります。

② 次に、子どもにわかる手がかりを検討し「意図的に」使ったりつくったりしたものを手がかりとして提示しましょう。

どんなことが子どもにとっての自然な手がかりになっているのかを見つけることができれば、その手がかりを意図的に子どもの受信の方法として用いることができます。

「帽子をかぶると『散歩の時間だ』ということがわかり喜ぶ」子どもには、「おとなが意図的に子どもに帽子を見せたり触らせたりする」ことで、「帽子」が「散歩に行くよ」と子どもに伝える受信のツールとなります。「教員が子どもの首の下に手を入れると抱っこされることがわかって嬉しそうにする」子どもには、「大人が抱っこの前に子どもの首の後ろに手を入れ、意図的に2回ほど首の後ろをやさしくたたいて子どもの様子を見る」ことをしてみます。それで嬉しそうになる様子が観察されれば「首の後ろをやさしく2回たたく」ことが「抱っこをする」ことを子どもに伝える受信のツールとなります。

これを実践してみたら・・・

エミリさんが大好きなシーツブランコの活動について様子を観察すると、朝の会の時に「シーツブランコの歌」を教員がエミリさんの体に触れながら歌った時に笑顔になることが観察されました。また、シーツブランコにのるとシーツブランコの布の手触りを自分から手を出して確かめている様子が見られました。

学校では、エミリさんに「シーツブランコ」の活動の予告として、ハンカチ程度の大きさシーツブランコと同じ布をエミリさんに触ってもらいながら、「シーツブランコの歌」を歌うようにしました。繰り返すうちに、エミリさんも自分から布に触ってくれるようになり、シーツブランコへの期待も増すようです。

このような方法をお母さんにも伝え、家庭の生活の中でのエミリさんに伝える手がかりも、一緒に検討してみることにしました。

もっと知りたい人はこちら

1. 国立特別支援教育総合研究所（2009）．重複障害児のアセスメント研究－視覚を通じた環境の把握とコミュニケーションに関する初期的な力を評価するツールの改良．
2. 中澤恵江（2000）．障害の重い子供とのコミュニケーションと環境をめぐって．肢体不自由教育（146）, 20-29.



独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所
National Institute of Special Needs Education
<http://www.nise.go.jp>

感覚障害（聴覚障害）が
ある場合の行動観察の視点



感覚障害（聴覚障害）が ある場合の行動観察の視点

こんなことはありませんか？

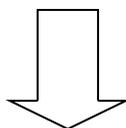
メグさんは、今2歳です。地域の療育センターに週1回通っています。家庭ではテレビの幼児向け番組が大好きで、なじみのある歌のダンスを見て、一緒に踊っています。

保護者から、「聴覚にも障害があると言われたのですが、病院ではきちんと検査ができません。家庭でもきこえているのかどうかよくわかりません。」と尋ねられました。

特別支援学校の教育相談の場面でも、音のなるおもちゃで遊びますが、本当にきこえているのかどうか、どの程度きこえているのかよくわかりません。



ここがポイント



子どもの生活している場面の行動観察から、きこえの実態把握の手がかりを探りましょう！



このように考えてみましょう

聴覚障害は他者から見て非常にわかりにくい障害であるとともに、聴覚障害の種類や程度により一人ひとりきこえ方は異なります。加えて、障害が重く、重複している子どもさんへの聴力測定は明確な反応が得られないといった理由で、測定困難とされることもしばしば見受けられます。

しかし、医療機関や教育機関における聴力測定が困難でも、日常生活における行動を観察することによって、きこえているのかきこえていないのかを推測することは可能です。

私たちの身の周りには様々な音があふれています。日常生活の中における環境音に対して、子どもがどのような行動を示すか観察してみましょう。

行動観察のポイントは、音が鳴った時の振り向きだけでなく、驚く、泣く、音を探す、身体の一部が動く、発声、笑い、呼吸の変化といった様子や、逆に音がなくなった時の動き、停止、方向、変化等の様子等も併せて記録をとることです。また、音源からの距離も必ず記録しておきましょう。

学校だけでなく、家庭の中にある様々な音をきかせた時の様子も記録し、医療機関における聴力測定結果と照らしあわせていくことで、より正確な聴力の把握が可能となります。

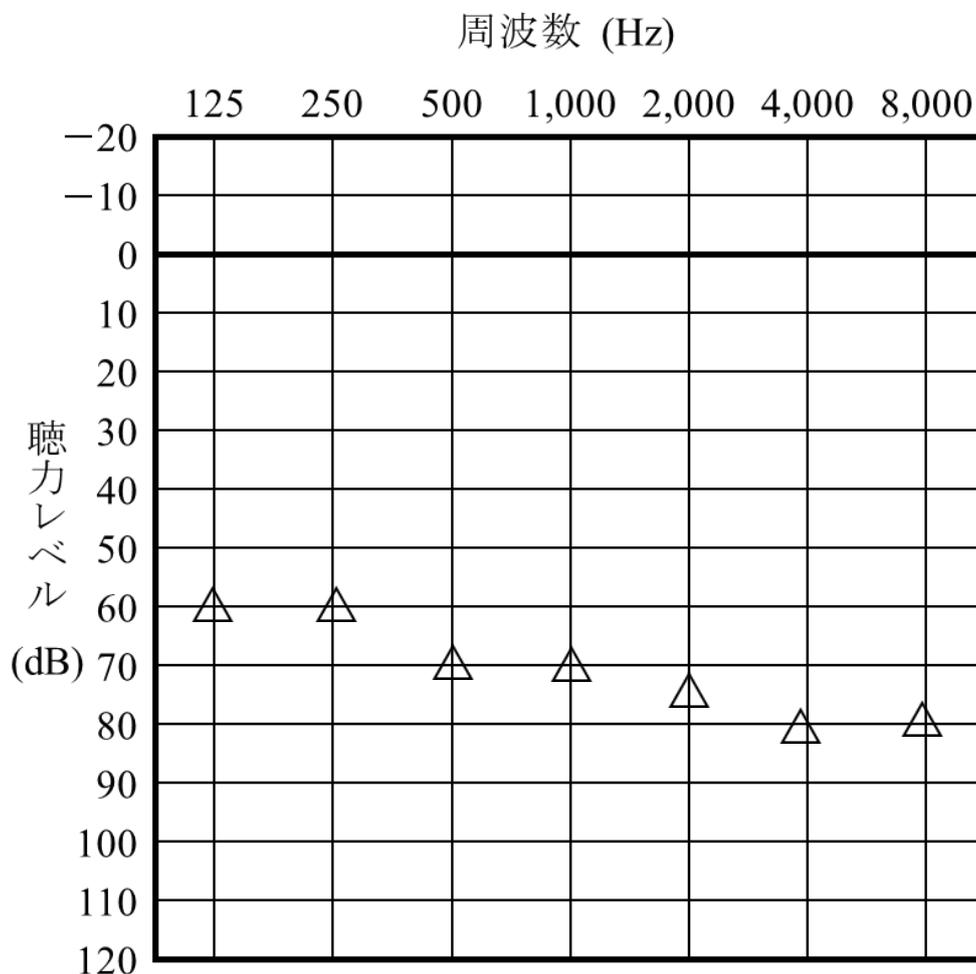
身の周りにおける環境音の例

学校で	バスのドアの開閉音 教室のドアの開閉音 靴をバタバタさせる音 朝の会のCDの音 校内放送 給食の食器が触れる音 水を流す音 電気をつける音 鍵をかける音 窓やカーテンの開閉音 ほうきで履く音 ピアノやエレクトーン、太鼓等楽器音 トイレの流水音 先生（男・女）の声 お友達の声 チャイム 拍手
家庭で	電話のベル 携帯電話の着信音 時計の音 掃除機の音 まな板の音 玄関チャイムの音 犬の鳴き声 食器どうしがぶつかる、テーブルに食器を置いた音 洗濯機が回る音、ブザーの音 赤ちゃんの声 ナイロン袋から物を取り出す音 冷蔵庫の開閉音
屋外で	自動車のクラクション 自転車のベル 鳥の鳴き声 駅のアナウンス 救急車やパトカーのサイレン オートバイの音 飛行機の音
自然の音	雷 雨 雨が雨戸に触れる音 ひょう 波 風

私たちの身の周りにはあらゆる音があふれており、これらはほんの一例です。それぞれの学校や家庭での環境音についてふりかえり、リストを作るのも良いですね！

具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

学校や家庭の中にある様々な音をきかせた時の様子を記録しておき、後日騒音計を使って、その音の周波数と音の大きさを調べ、オーディオグラムを作成することにより、標準聴力検査だけでは得られない、もしくは標準聴力検査が困難な子どもの聴力が推定できます。騒音計は高額ですが、聴覚特別支援学校の先生に貸借を依頼する、もしくは測定してもらうと良いでしょう。



メグさんのオーディオグラム (推定)

△は、聞こえていると思われる値

これを実践してみたら・・・

メグさんは、うるさいところでの話し手の声、ヒソヒソ話、鈴やディナーベルなどの楽器はきこえていない様子であること、太鼓の音やドアの開閉音に気づくといった学校の様子を聴覚特別支援学校の先生にお話ししたところ、先生が騒音計を使って、メグさんがきこえている・きこえていない様子を示した音の大きさと周波数を測定してくれました。その後 話し合いの中で、「周波数の高い音や、小さな音はきこえにくい可能性がありますね。」と、行動観察から推測されるオーディオグラム（聴力図）を作成・説明してくれました。

こういう方法をお母さんに伝え、学校でも取り組んでみることになりました。また、家庭での様子をお母さんに観察してもらい、その記録と医療機関における測定結果も併せて、より正確な聴力を把握していく方向性を確認しました。

もっと知りたい人はこちら

1. 沖津卓二（2010）：重複障害児の聴覚医学的問題, *Audiology Japan*, 53, 664-676. .
2. 菅原廣一（1985）：COR Audiometryによる重複障害児の聴力閾値検査について, *Audiology Japan*, 28, 156-167.
3. 菅原廣一・我妻敏博・高橋信雄（1981）：重複障害児の聴性行動反応の測定, *国立特殊教育総合研究所研究紀要*, 8, 17-26.
4. 田中美郷・針谷しげ子（1998）：聴覚障害を有する重度脳障害児の難聴診断と対策, *音声言語医学*, 39, 428-441.
5. 立石恒雄・木場由紀子（編）（2004）：言語聴覚士のための子どもの聴覚障害訓練.



独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所
National Institute of Special Needs Education
<http://www.nise.go.jp>